「の」の特性と統語構造

山田昌史
島根県立大学

本論では、「赤いの」のような名詞句に含まれる「の」について考察した。「の」は、(i)単独で名詞として生じることができない、(ii) 共起する連体修飾表現に制限があるなどの点で統語的な特徴を示すが、その一方で、金水(1995)が指摘するように、「の」の生起は、語用的な制限がかかる。本論では、Chomsky (2000)以降で展開された phase の概念を援用して、「の」の語用的側面を統語構造から導き出せるよう理論を整備し、あわせて(i)-(ii)の統語的特徴についても説明できる名詞句の構造を提案した。具体的には、DP を CP と同様な phase とみなし、名詞句が意味解釈に関わるインターフェイスにより旧情報となる名詞句であると判断されると、その DP の主要部に[G]素性を仮定し、これを下位の機能範疇（FP）の主要部に指定された phi 素性によって照合することで、音声部門においてこの[G]素性が「の」と発音されると分析した。本論の提案により、これまでの「の」の分析とは異なる視点からその統語的・意味的特徴の両面が適切に捉えられることを示した。

Introduction

(1)の例が示すような日本語の同格連体名詞（奥津(1974)）の「の」に関して、記述（cf. 奥津(1974)など）、統語（cf. Saito & Murasugi(1990)、Ohmura(1992)、神尾(1983)など）、意味（cf. 金水(1995)など）などの観点からこれまで議論されてきた。

(1) a. 太郎の鉛筆は高価だが、花子**の**は安い。
　　b. 赤い車はよく売れるが、黄色い**の**はあまり売れない。

(1a)では、前節の名詞句内の主名詞「鉛筆」が後節では前節と同じ要素であるために省略されている。また、(1b)では、前節の名詞句

内の主名詞「車」が後節では現れず、前節の名詞句「赤い車」の中に存在しない「の」が名詞の主要部として現れている。このように「の」に先行する修飾語の品詞によって「の」の性質は幾分異なるものの、どちらの「の」であっても以下のように、それ自体が独立した名詞句となることができず、本来的な名詞句とは性質を異にする。

(2) a. *のは安い。
　　b. *のはあまり売れない。

これらの事実から、「の」は（代名詞的な）名詞としての性質を単独では持たないと言えるが、(1)のように修飾要素を伴って先行する節内（または、はっきりと「の」の指示物が同定できる発話内）の名詞の代わりとして（この意味では、代名詞的な働きを持つ要素である）後節に出現して、主要部名詞としての性質を持つのである。

また、「の」に先行する修飾要素に注目すると、(1a)のような所有を表す名詞句、(1b)のような形容詞に加えて、以下のように数量表現（＝(3a)）や文（＝(3b)）などと生じることができる。

(3) a. 1000cc の車はそれほどでもないが、2000cc のはガソリンを食う。（神尾 (1983): 88 を改例）
　　b. 君が読んでいる本は面白そうだが、僕が読んでいるのは面白くない。（Kitagawa & Ross (1982)を改例[1]）

このような言語事実について、これまで(i)主名詞削除後に残る「の」が属格の「の」であるとする分析（cf. Murasugi & Saito (1990)）、(ii)代名詞的な名詞であるとする分析（cf. 神尾(1983)）、(iii)補文標識とする分析（Tonoike (1991)など）など、様々な提案がなされてきた。しかし、これまでの分析は、「の」に関わる諸問題を包括的に捉える

[1] 但し、本論では、(3b)のような文が「の」の修飾要素になっている例に関しては、関係節との関係を考える必要が生じるため、このような例の存在を知りつつも本論では深く立ち入らない。

ことができない。そこで本論は、新たな視点から「の」の分析の方向性を探ることでその分布が説明できる理論を提案することを目的とする。具体的には、(A) 基本的には、神尾(1983)などに従って、「の」は、統語構造からその特性が説明できるであるとし、(B)「の」は代名詞としての性質でも属格の「の」でもなく、語用的な要請（cf. 金水(1995)）から統語構造に義務的に導入される要素であると分析し、(i) 「の」の特性を明らかにしながら、(ii)その語用的機能を統語構造から予測できるよう Chomsky(2001, 2004)などを援用して統語構造を整備し、(iii) 「の」は語用的要請から統語構造に導入される素性を照合し、それを音声部門で音声化した結果生じる要素であることを提案する。

本論の構成は、以下である。１節において「の」の特徴を明らかにしながら、先行研究（神尾(1983)、Saito & Murasugi (1991)、金水(1995)など）を概観し、「の」の分布は統語的側面と語用的側面の２つの面から捉えられるべきであることを示す。２節では、１節の「の」についての考察を統語構造から導き出すために、(I) Chomsky (2000)以降の Minimalist Program で導入された phase の概念を導入して名詞句の構造を仮定し、(II) 「の」の分布に見られる言語使用の観点を統語構造から捉えることが可能であることを示す。そして、本論の提案は、「の」の諸特徴を正しく捉えられることを示す。最後に本論をまとめながら、本論の課題を述べる（３節）。

1. 「の」の特性と統語構造

本節では、「の」の基本的な特徴を明らかにしながら、それに関する先行研究を議論する。

1.1. 神尾 (1983)

神尾 (1983)では、(i) 「の」によって置き換えられることが可能な名詞の一般的な特性、(ii) 「の」が生じることが可能な構文に生起する修飾要素の種類を明らかにしながら、(ii)の特徴から、連体修飾要素は、（神尾が主張するところの）NP'の投射内に存在するものと

NP の投射内に存在するものに二分割する必要があり、どちらの投射に修飾要素が投射されるかによって「の」の文法性が説明できるとする。

神尾(1983)は、以下のように、抽象的な名詞は、「の」によって置き換えることができないことから、「の」で置き換えられる名詞は具象名詞であるとの一般化を導き出した。

(4) a. かたい信念を持った人
b. *かたいのを持った人
c. 鋭い批判精神の持ち主
d. ??鋭いのの持ち主 (神尾 (1983): 82)

(4a)の主名詞「信念」は、具象物を示す名詞ではないため、これを「の」とすると(4b)のように、容認されない。(4c)の主名詞「批判精神」も同様に、具象名詞ではなく、(4d)のように「の」による置換を許容しない。

また、神尾は、以下のように(1)や(3)の例とは異なり、(5)のような修飾要素が指示詞や数量詞、数詞の場合、主名詞が具象名詞であっても容認されない例があることを指摘している。

(5) a. *あの（の）は面白い。(cf. あの本は面白い。)
b. *一種の（の）です。(cf. 一種のコンピューターです。)
c. *３本の（の）を買ってきた。(cf. ３本のビールを買ってきた。)
d. *ある（の）がそう言った。(cf. ある男がそう言った。)
(神尾 (1983)：82[2])

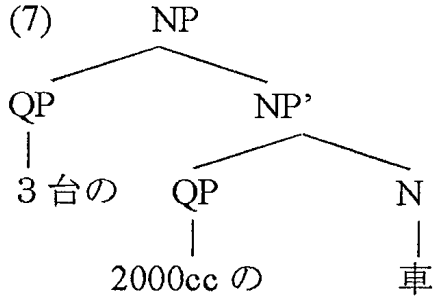
但し、(5c)のような数量詞の場合、先に述べた(3a)の例のように「の」置換を許容する例も存在する。

[2] （の）の表記は、神尾によると２つ並んだ「の」のうちの一方として削除されることを示しているとのことで、つまり、主名詞が置き換わった「の」であり、属格の「の」ではないことを示している。

(6) a. 1000cc の車はそれほどでもないが、2000cc のはガソリンを食う。
b. 4×4cm の紙片は鶴を折りやすいが、3×3 のは折りにくい。
c. 500ml のビンは持ち運べるが、1ℓ のは持ち運びにくい。
d. 800m の橋は建設に 1 年を要するが、500m のは半年ですむ。

このような数量詞は、主名詞の数量を規定しているのではなく、主名詞のもつ性質を表している。例えば、(6a)では、車の数量が 2000cc なのではなく、車が 2000cc のエンジンを持つという車自体の性質を有している。そのため、数量詞というよりは形容詞に近い性質を持つ要素である。神尾は、数量詞には、(i) 主名詞の数量を規定するものと(ii) 主名詞の特徴を示すものの２つが存在することを指摘し、それぞれ別の統語位置を占めると分析する。(i)は NP の投射内に、(ii)は NP'内の投射内に投射されると仮定する。例えば、「３台の 2000cc の車」のように(i)と(ii)が共起する名詞句は以下のような統語構造を持つ。

(7)

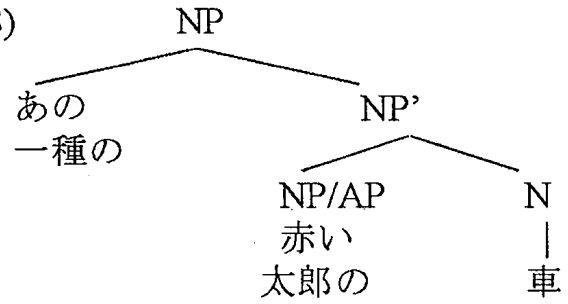


(神尾 (1983)：89)

数量を表す「３台の」は、NP の投射内に、車の属性を示す数量詞「2000cc の」は NP'の投射内に投射する。

また、(1a)のような形容詞や所有を表す名詞句が修飾要素の場合、これらは、NP'の投射内に生成されると仮定し、(5)の指示詞や決定詞は、(7)の数量詞と同じ統語的位置を占めると仮定する。

(8)



そして、(9)のような「の」代替の規則を仮定することによって、「の」と共起可能な修飾要素が制限できると分析する。

(9) 「の」が主名詞として生じる場合には、NP'の下に修飾語句を1つ以上持たなければならない。 (神尾 (1983) : 85[3])

(9)から、(i) 単独で「の」が生じないという事実 (=(2))、(ii) 指示詞や数詞が「の」と共に生じない事実 (=(5)) が捉えられる。

神尾 (1983)は、NP 構造とそれぞれの修飾要素がその内部のどの投射内に現れるかという2つの点から(5)と(6)の文法性の差異を導き出した。しかし、神尾の分析にはいくつか問題がある。

まず、神尾が一般化として提出した「抽象名詞は、『の』に置き換わることができない」という一般化は、Saito & Murasugi (1990)、金水(1995)などによって経験的に妥当でないことが示されている。以下のように、抽象的な名詞が「の」に置き換わる例が存在する。

(10) a. 学生の先生への依存は許せるが、院生**の**は許せない。
b. 太郎の研究に対する態度は良いが、花子**の**はよくない。
(Saito & Murasugi 1990:288)

いわゆる複雑事象名詞 (cf. Grimshaw (1990)) に分類される「依存」は、具象物を表す名詞ではなく、できごとを表す名詞である。そのため、神尾の分析では、「の」による置換を許容しないはずであるが、

[3] ここで注意が必要なのは、(7b)では、主名詞が「車」が「の」で置き換えられると「2000cc のの」と2つの「の」が連鎖することになる。神尾 (1983)は、奥津 (1974)に従い、一方の「の」が削除されることで、「2000cc の」が生成するとする。

事実は異なる。

また、金水 (1995)も以下のような「の」で置き換えられた主要部名詞が抽象名詞である例を観察している。

(11) a. 恋愛にも[派手なの]と[地味なの]がある。　（の＝恋愛）
b. [右からの進入]は [左からの]より難しい。　（の＝進入）
c. [その時監督をもっとも感心させた打撃]は、[田中の]だった。
（の＝打撃）（金水 (1995): 157）

抽象名詞である「恋愛」、動作名詞である「進入」は、神尾の分析では「の」で置き換えられないはずであるが、(11)のように文法的である。このことから、神尾の一般化は、「の」置換が可能な主要部名詞の性質として一般的な特性を捉えていると言えるが、必ずしも絶対的ではない。

また、神尾の提案する(7)・(8)の統語構造は、修飾要素の性質の違いによって２つの統語的位置が区別されるとするが、NP、NP'のそれぞれの投射に収まる修飾要素がどのような基準によって必然的に分類されるのかについて明確な議論がない。さらに、(9)で、「「の」は、１つ以上の修飾要素を持たなければならない」と規定されるが、なぜその必要があるのか原理的な説明が与えられていない。

また、名詞句の構造は NP 構造ではなく、その上位に決定詞を主要部とする機能範疇 DP を仮定する必要があるとの提案（cf. Abney (1987)など）を受けて、新たな理論展開を見せている。「の」に関する分析もこのような理論の進展に伴って、再分析が試みられている。次節では、DP 分析に従って「の」の分析を行った Saito & Murasugi (1990)の分析を概観する。

1.2 Saito & Murasugi (1990)

前節までに、神尾 (1983)の「の」に関する分析から、その基本的な性質が明らかとなったと同時に、「の」に対する分析は、(i)「の」が単独で生じ得ないのはなぜなのか (ii) 「の」に前置される修飾要素の統語的位置はどのような基準によって決定されているのかに関し

て明確な分析を提示することが肝要であり、神尾(1983)の分析は、この２つの点に十分な理論的説明が与えられていないことを見た。本節では、Saito & Murasugi (1990)（以下、S&M (1990)と略記する）の分析を概観して、上記２つの観点から適切な理論的説明がなされているのかについて検討する。

S&M (1990)の分析は、分析対象を詳細に吟味し、分析可能な事実を仔細に認定して「の」に関する分析を提出している。前述のように、神尾(1983)は、「の」は抽象名詞の代替の対象とはならないとの一般化を導いたが、S&M (1990)は、以下のように、抽象名詞が「の」に置き替わる事実を指摘している。

(12) a. 学生の先生への依存は許せるが、院生**の**は許せない。
　　 b. 太郎の研究に対する態度は良いが、花子**の**はよくない。
(= (4))

「依存」「態度」は具象名詞ではないが、「の」に置き換わっている。しかし、これらの事実を S&M (1990)は、神尾の分析に対する反例とはみなさず、神尾の分析の対象外に存在する、つまり、主名詞の代名詞的な要素である「の」とは別種の「の」であり、異なるメカニズムによって生じた「の」であるとする。つまり、S&M (1990)では、「の」は１つのタイプに分類されるのではなく、(i) 神尾の主張する具象名詞と置き換わる「の」と (ii) (12)のように、(i)とは別種のメカニズムによって生じる「の」の２つの種類があると主張する。S&M (1990)は、(ii)タイプの「の」に限って、統語的な観点から分析を試みている。

(12)と同様に主要部に「依存」を持つ名詞句であっても、以下の例は容認されない。

(13) *その時の山田先生への依存は、太郎のだった。

(12)と(13)の文法性の差異は、どのように導きだされるのか説明する必要がある。S&M (1990)は、それ以前の名詞句の構造（cf. Chomsky

(1981)など）からは、両者の違いは導きだされないとする。つまり、(12)・(13)がそれぞれ(14)・(15)のような名詞句の構造を持ち、Jackendoff (1971)や Hamkamer & Sag (1976)の「復元可能性」（recoverability）に従って、どちらもN'要素が削除されると、両者の文法性の違いが統語上の違いとして捉えることができないとする。

(14) [$_{NP}$ 院生の ~~[$_{N'}$ 先生への 依存]~~]

(15) [$_{NP}$ その時の ~~[$_{N'}$ 山田先生への 依存]~~]

そこで、S&M (1990)は、Abney (1987)の提案以来、名詞句分析の中心的な役割を果たしている、英語の名詞句に生起する決定詞に独立的な地位を与え、それを統語的に捉えるために主要部をDとする機能範疇をNP上位に据える統語構造を仮定する。このDP分析に基づくと、(12)-(13)は、以下のような統語構造を持つ。

(16) [$_{DP}$ 学生の$_i$ [$_{NP}$ t_i 先生への依存]]は許せるが、[$_{DP}$ 院生の$_j$ ~~[$_{NP}$ t_j 先生への 依存]~~]は、よくない。 (S&M (1990): 293)

(17) [$_{DP}$ その時の [$_{NP}$ 山田先生への 依存]]は、[$_{DP}$ 太郎の ~~[$_{NP}$ t_i 山田先生への 依存]~~] だった。 (S&M (1990): 293)

(16)では、「学生の」「院生の」は、Nからtheta役を受けるためにNPの投射内に基底生成し、属格の認可のためにDPの指定部に上昇している。(17)では、先行名詞句に含まれる「その時の」が、(16)の「学生の」と同じ統語位置にある。S&M (1990)は、付加詞は、DP内、NP内のいずれの位置に基底生成してもよいと仮定する。そのため、(17)の「その時の」は、削除に必須となる統語構造における同一性を求めて、NP内に生じてDP内に移動することが可能となる。しかし、theta役を主要部から付与されない付加詞が移動をした場合、移動そのものがECPによって排除される。そのため、(17)において付加詞「その時の」がNP内に基底生成し、移動によってDP内に位置することはない。また、「その時の」がDP内に基底生成することになれば、「太郎の」のDP指定部への移動の痕跡を含む後続名詞

句との相同関係が見いだせず、削除の原則に反することとなる。そのため、(17)の NP 削除は容認されないことが統語構造と移動の原則から導きだされる。つまり、S&M (1990)の分析が射程に入れる「の」は、奥津(1974)や神尾(1983)が仮定する主要部名詞句が「の」に置き換えられることによって生じる要素ではなく、DP 内に移動することで、その範疇の主要部 D によって認可される属格の「の」であることとなる。

このような NP の削除の現象においては、NP の投射内から DP の指定部への義務的な移動が必須であると主張する。以下のような例を検討する。

(18)*最近は、[$_{DP}$ 晴れの [$_{NP}$ 日]] が [$_{DP}$ 雨の ~~[$_{NP}$ 日]~~] より多い。
(S&M (1990): 295)

(18)では、上記の付加詞の統語的位置の議論から、DP の指定部の位置に基底生成すると分析できる。そのため、どちらも移動の痕跡を含まず、主要部のみを含む NP が削除の対象となり、削除に必要な相同性を NP が有している。このため、文法的であることを予測するが、事実は異なる。(16)と(18)がそれぞれ持つ統語構造の違いが、NP 削除の必須条件となる。文法的な(16)は、NP 内から DP 指定部への移動を含むのに対して、非文法の(18)はそれを含まない。このことから、NP 内部から DP の指定部への移動が NP 削除において必須であることが分かる。

S&M (1990)の分析で重要なのは、(i) 日本語も英語と同様の DP 構造を持ち、(ii) DP 内での移動の可能性を示し、(iii) 「の」が主要部代替による代名詞的な「の」(cf. 神尾(1983)) とは異なる「の」が存在し、それは、指定部への移動によって生じる名詞句の属格の「の」であることを示した点である。

しかし、S&M (1990)の分析には、いくつか問題があると思われる。まず、NP 投射内からの義務的な名詞句の移動が起こり、その移動の痕跡を含む NP が同一性のもとに削除される訳だが、なぜ、NP の

削除の際に名詞句の移動が必然となるのか、原理的な説明がなされていない。特に、近年の統語要素の移動に必然性を求める Minimalist Program (Chomsky (1995, 2000, 2004 など))においては、S&M(1990)が提案する DP 内の移動が明確な統語的要請に従って、駆動されているのか、または、どのような素性に導かれて移動が強制されるのか明確に示す必要がある。

また、DP 内部の移動自体の必要性についても、Ohmura (1992)が問題点を指摘している。

(19) a. 今年の 100m 走のベンジョンソンの記録の更新は、昨年のよりも話題をよんだ。

b. 今年の 100m 走のベンジョンソンの記録の更新は、昨年の 200m 走のよりも話題をよんだ。

c. 今年の 100m 走のベンジョンソンの記録の更新は、昨年の 200m 走のカールルイスのよりも話題をよんだ。

(Ohmura (1992): 104-105[4])

(19)では、「の」に前置する修飾要素は、どれも(13)や(18)の例と同様な付加詞として働く修飾要素であり、S&M(1990)の分析では、これらは DP 内において移動の対象とはならない要素である。そのため、S&M(1990)の分析では、非文法的であることを予測する。しかし、(19)のように文法的である。このことから、S&M(1990)の分析は経験的にも問題があると考えられる。

ここまで、「の」について統語的な観点から２つの分析を見てきた。「の」は、統語的に (i) 単独で名詞句を構成できないこと、(ii) 「の」に先行する連体修飾表現に制限がみられることの２つの観点について正しく捉えられることが重要であることが分かった。次節では、

[4] Ohmura (1992)では、(19)の文法性は、Fukui (1986)に従って名詞句内の「の」を伴った要素は、どれも付加詞として生起する要素で、削除される名詞句とその照応名詞句の構造の同一性が保証されればどの部分を削除してもよいとする。本論では、Ohmura (1992)の妥当性についてはこれ以上立ち入らないが、(19)の観察に関しては大変重要な観察であると思われる。

語用論的な観点から「の」の特徴を説明する金水(1995)の分析について概観する。

1.3. 金水(1995)

S&M(1990)では、「花子の（研究に対する態度）」のような主要部が具象名詞以外のもので、連体修飾表現につく「の」が属格としての「の」であるものと主要部が具象名詞であり、「の」が主要部の代替要素として生じる「赤いの」の「の」のような代名詞として働く「の」の二分割の必要性を指摘し、前者のタイプについて、統語構造にDP構造を仮定し、「の」を伴った要素がDPの投射に移動して、NPを削除することで生ずると統語的に分析するものであった。特にこの分析によって導きだされた「の」は、神尾(1983)の主張する抽象的な名詞句のケースであり、神尾が考察しなかった例から事実観察と理論提示を行い、「の」についての研究を押し進めた。本節では、前節までとは異なり、「の」が生じる語用的環境について議論する金水(1995)を概観する。

前述のように、金水(1995)は、「の」が抽象的な名詞句の場合、「の」が生じないとする神尾の一般化について疑問を呈している。((11)を以下に採録)

(20) a. 恋愛にも[派手な**の**]と[地味な**の**]がある。(の＝恋愛)
b. [右からの進入]は [左から**の**]より難しい。(の＝進入)
c. [その時監督をもっとも感心させた打撃]は、[田中**の**]だった。
(の＝打撃)　　(金水 (1995): 157)

(20)に生じている「の」は、どれも対比的な文脈または選択的な文脈で使われるものである。金水は、「の」は、その置き換えの対象となる名詞が、抽象・具体どちらであろうと、このような文脈に生じることができるものでなければならないとする。神尾(1983)が観察した例（＝(21a)）も(21b)のように明らかに対比的な文脈に生じると文法性が上がることを観察している。

(21) a. *固いのを持った人　(=(4b))

b. 信念には固いのと柔らかいのがある。　(金水(1995): 158)

このような事実から、金水(1995)は、以下のような「の」が生じる語用な条件を提案している。

(22)　代名詞「の」の対比的文脈条件

$\ldots[_{NP}\, A_1 \quad [_{NP}\, B_1]\,] \ldots [_{NP}\, A_2\, [_{NP}\, B_2]\,] \ldots [_{NP}\, A_3\, [_{NP}\, B_3]\,] \ldots$

ここで、NP は伝統的な意味での名詞句、A は連体修飾成分である。

名詞句 A_1B_1、A_2B_2、A_3B_3 が対比的な文脈に置かれており、かつ

$A_1 \neq A_2 \neq A_3$

$B_1 = B_2 = B_3$

が成立するとき、B_2, B_3 は「の」に置き換えることができる。

ただし、先行詞 A_1、B_1 は明示的に現れていても、前提として明示されていても良い。　(金水(1995)：158)

また、以下のような S&M(1990)が付加詞である修飾要素と「の」が共起しない事実（=(23)）については、削除された主名詞が適切に復元されていないために容認されないのであって、統語構造による分析によって説明されるものではないとする。

(23) a. *最近は晴れの日が雨のよりも多い。

b. *２切れのハムは夕食になるが、１切れのはならない。

(金水(1995): 158)

例えば、(23a)の「日」という概念は、時間を分割した単位を形成する要素で、それ自身が自然なクラスをなさないという。また、(23b)のような数量表現は、主名詞をサブクラスに分割するものではない。このような主名詞の場合、「の」削除が適切になされないとする。金水は、以下のような「の」に関する意味的制約を提案している。

(24) a.　主名詞は、自然なクラスを指示対象としていなければならない。

b. 修飾語句は、主名詞のクラスを自然なサブ・クラスに分類しなければならない。　（金水 (1994): 159）

金水(1995)の分析によって、「の」が意味的な環境によってその照応要素が制限されること、「の」と共起する連体修飾要素が意味的な制約を受けることが明らかにされた。つまり、(22)・(24)の２つの条件から、金水(1995)は、「の」の生起については、統語的な条件ではなく、その意味的な条件によって、その文法性が決まることを明らかにした。

このように、金水(1995)によって、「の」の生起は、意味的な側面を考慮する必要があることが示された。しかし、その生起に関わる意味的な制限は、対比的というよりも語用的なレベルの制限であることを示すと思われる事実がある。以下の例を観察する。

(25) a. どんな**の**を買ったの？
b. 誰**の**を見たの？
c. どこ**の**を食べたの？

これらの例では、疑問を表す「どんな」「だれ」「どこ」と共に「の」が生成している。これらの「の」を伴った疑問詞は、先行文脈があって成立する。(25)の各文は、語用的な環境が示されず、その意味内容を特定することは不可能で、「の」が生じるには、語用的な環境が必要となる。つまり、(25)の例が文法的であるためには、(26)のような文使用の段階で初めて「の」が示す内容が明らかになる。

(26) a. A: 昨日、新しいバッグを買ったの。
B: どんな**の**を買ったの？
b. A: 昨日、コンサートを見に行ったよ。
B: 誰**の**を見に行ったの？
c. A: 中華街のお店で肉まんを食べたよ。
B: どこ**の**を食べたの？

(26)の「の」は、それぞれ先行文の「バッグ」「コンサート」「お店」を照応する。つまり、「の」が照応する要素は、文使用の段階で前提となっていなければ、(25)の例は容認されないのである。

また、以下のような例においても、同様のことが当てはまる。

(27) a. A: 最近、太郎君とつきあい始めたの。
B: え、あんな**の**とつきあってるの？
b. A:明日、大地震が起こるってニュース、知ってる？
B: そんな**の**知らない。
c. （まずいコーヒーを飲みながら）
こんな**の**いらない。

どの例においても、「こんな」「そんな」「あんな」という程度を表す修飾要素が先行要素内の名詞を照応している。つまり、「の」は、それの使用場面において、既知の情報、つまり、旧情報を担うのであり、その意味内容は言語使用の観点から分析される必要がある。

しかし、金水(1995)の分析や上述の例に見られる語用的な条件のみで本論で議論している現象の全てが説明できるという訳ではない。問題になるのが、「の」が単独で生起できないという事実である。

(28) a. ***の**は安い。
b. ***の**はあまり売れない。 (=(2))

金水(1995)の(22)の規則や「の」が旧情報を担うとしても「の」が単独で生じえないことに原理的な説明が与えられない。また、以下のような神尾(1983)が非文であるとした事実であるが、(30)のように数量表現と「の」の間に形容詞などの連体修飾要素を加えると文法性が高まる。

(29) a. *あの（の）はおもしろい。（「の」＝本）
b. *ある種の（の）です。（「の」＝結論）
c. *３本の（の）を買って来た。（「の」＝ペン）

d. *あるのがそう言った。(「の」＝女優)　(=(5))

(30) a. この大きなのは面白い。

b. ?ある種の奇妙なの

c. ３本の特殊なの

d. ある有名なの

また、(30)の語順を入れ替えて「形容詞一数量詞」の語順で連体修飾詞を並べても文法的にはならない。

(31) a. *大きなこの(の)は面白い。

b. *奇妙なある種の(の)

c. *特殊な３本の(の)

d. *有名なある(の)

このことから、形容詞が「の」に最も隣接する位置を占めた場合が最も文法的な代名詞表現「の」が生起しやすいと考えられる。これらの事実は、「の」が統語的な制約をもとに説明される必要があることを示唆する。つまり、「の」の分布は、統語的制約と語用的制約の２つの観点から考察しないと適切な分析が提示できないと言える。

そこで本論では、「の」が生じるためには、金水(1995)の提案や(25)-(27)の事実から語用論的な環境が整うことが重要であると考えるが、(i) 「の」が単独で生じないこと、(ii) (30)のような修飾要素の制限[5]については、統語的制約によって捉えるべき問題と考える。そこで、次節以降で、Chomsky (2000)以降の Minimalist Program で提案された phase の概念を援用して名詞句の統語構造を示しながら、

---

[5] 英語においても以下のように、形容詞が共起すると本来、one の修飾要素として許容されなかった many や two が共起できるとする事実がある。

(i) a. *many ones
b. *two ones

(ii) a. many green ones
b. two green ones　(Lombart-Huesca (2002): 61)

つまり、形容詞が代替表現の修飾要素となるともっとも安定的な名詞句を構成すると考えられる。

これまで見てきた「の」に関する事実が提案する統語構造からどのように捉えられるか考察する。

2. 提案

本節では、これまで見てきた「の」の性質が統語構造から捉えられることを示す。具体的には、「の」の意味的・語用的な特性を捉えるために Chomsky (2000, 2001, 2004)等が主張する phase を名詞句にも仮定し、名詞句が機能範疇 DP を通じて語用的側面を反映できる理論を提示する。また、形容詞と「の」の関係についても同様に、名詞句内に仮定する機能範疇内での Agree 関係の構築によって正しく捉えられることを示す。

本節では、まず、Chomsky (2000)等で仮定される phase について概観して（2.1 節）、2.2 節で本論の具体的な提案を示す。

2.1 Phase の概念

本節では、本論での具体的な提案を論じる前に本論が採る理論的枠組みについて触れておく。本論は、神尾(1983)、S&M (1990)などを踏襲して、「の」の諸特徴は、統語構造から説明されるとして論を進める。特に、本論がこれまでの「の」に関する先行研究と大きく異なるのは、Chomsky (2000)以降の phase の概念を名詞句に採用して、phase が統語構造において果たす役割を追究することで「の」を統語的に説明することを試みる点である。そこで、本節では、phase についてその役割と機能についてまとめておく。

MP の出発点となった Chomsky (1995)では、(i) 文の構築に当たって語彙項目（=Lexicon）から、それに必要な要素を取り出して数え上げ（=Numeration）によってあらかじめ文に必要な要素を全て書き出してリスト(=Lexical Array (LA))化し、(ii) 文の全ての要素が統語構造内で適切に認可されてから PF・LF のインターフェイスに送付する文構築のモデルが示された。しかし、このような考え方では、(i)のリストに記載される語彙の数が膨大になる可能があること、また、(ii)によって一度に相当量の情報が PF・LF に送られることにな

り、言語計算が複雑になるなど問題が生じる。そこで、Chomsky (2000)は、高い計算的合理性を追求して、文構築の際に基本となる単位としてphaseを導入する。phaseは、命題（または文）に相当する言語単位で、CPとvPの２つがその形成単位と仮定される。これらの単位を基本として派生を進めることで、(i) phase単位ごとに数え上げを設定することで、数え上げに含まれる要素の数を最小化できること、(ii) phase単位で（そのphaseにそれ以上先の派生に関与する要素がなければ）PF・LFに送る（=spell-out）ことで、計算単位を小さくして効率的な言語計算が行える言語理論へと転換した。

また、意味解釈や音声部門に繋がるインターフェイスとの接点となるphase（特にCP）は、GBなどの統語理論では中心的に扱われてこなかった情報の新旧や焦点化など、統語的な振る舞いを示しながらも意味的な特質ゆえに統語理論の中核に据えられなかった現象について新たな可能性を開いた(cf. Chomsky (2004))。つまり、phaseの概念を追究することでこれまでの文構築要素のみにその分析対象を限っていた理論体系を脱して、より広範囲な言語現象を扱うことが可能となる体系へと発展する可能性を秘めているのである。長谷川(2006)は、phaseを構成する主要な要素である命題は、語用的機能の影響によってその構築がなされると考えられる言語現象が日本語に顕著にみられることを指摘し、(特に日本語の統語構造において)発話・語用的機能から文構造の再検討の必要性を主張している。長谷川が指摘するように、phaseがどのように文構築に関与するかについては明確な理論的基盤の整備が必要であることは間違いないが、phaseを文構築と語用的要素を受け入れる窓口であると仮定することで、文と述部の２つの言語的な単位が外部のインターフェイスと文構造においてphaseを介して密接に関わることが可能となる。

また、意味的なインターフェイスがphaseを介して統語構造に影響を与える際に生じるのがOCC(=Occurrence) featureである。Chomsky (2004)は、以下のようにそれを定義している。

(32) Assuming options to be determined in LEX, the head of α must have a feature that makes this option available: an EPP-feature in standard terminology, or from another point of view, the feature OCC that means "I must be a occurrence of some β." Optionally, should be available only when necessary, that is, when it contributes to an outcomes at SEM that is not otherwise expressible. Hence H has OCC only if that yields new scopal or discourse-related properties. If H has OCC, then the new interpretable options are established if OCC is checked by internal Move; it is only necessary that the cyclic derivation D can continue so that they are ultimately satisfied with convergent of D. (Chomsky (2004): 112-113)

(32)では、意味的な解釈によって統語構造が変更を余儀なくされる場合、それに関わる意味解釈に関わるインターフェイスがphaseの主要部にOCCを導入し、その照合の必要性によって統語構造に影響を与える（移動を生じる）ことが提案されている。つまり、意味解釈をインターフェイスの働きによって、phaseを介して統語構造に反映させることが可能になったのである。このような観点から統語構造を再構築することによって、これまでの命題を中心とする統語理論から語用的側面を含めた総合的な統語理論が構築可能であると考えられる。

本論が議論している「の」は、1.3節で旧情報を担う要素であることを指摘した。このことは、本節で概観したphaseの特性を名詞句の統語構造に導入して理論を整備することで、「の」の統語分析に新たな視点を提供することが可能となると考えられる。そこで、以下の節で、phaseを含む名詞句の統語構造を提案して、その構造とphaseの働きから「の」の特性が導き出されることを論じる。

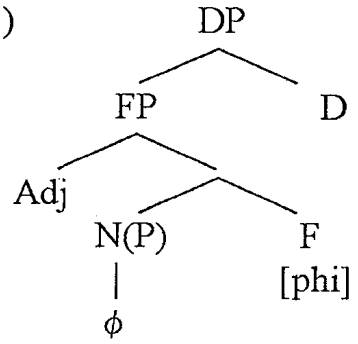
2.2 提案

前節では、Chomsky (2000)以降の提案する phase について概観した。この概念により、統語現象と文使用に関わる理論が整備され、これ

までの分析とは異なり統語構造と言語使用とのインターフェイスがphaseを通じて連携することが示された。本節では、このようなphaseの考え方を名詞句に導入することで、本論が議論している日本語の「の」についてもその振る舞いを統語構造から導きだすことが可能であることを主張する。

本論では、以下のような名詞句の構造を仮定する。

(33)



Abney(1987)の提案するDP構造を基盤として、さらにNPとDPとの間に機能範疇が介在する統語構造（cf. Alexiadou (2001), Picallo (1991), Ritter (1988)など）を仮定する。また、Chomsky (2004)に従ってDPをphaseとする。これまでも、CPとDPの平行性が指摘されて来た（Haegeman & Guéron (2001)など参照）が、本論はこれらの提案に従って、DPは文レベルのCPに相当する機能範疇であるとする。つまり、DPは、CPと同様にphaseであるとする[6]。この仮定から、DPは、CPと同様に文使用に際して統語的な効果を受け入れることが可能な語用と統語の接点となる範疇であると分析する。また、DPとNPの間に介在するFPは述語レベルの*v*Pに相当する機能範疇であると仮定する。つまり、名詞句は文と同様に２つのphaseを備える統語構造を備えるものであるとする。

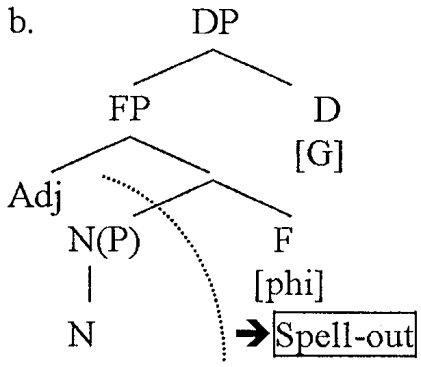
具体的な例から(33)の統語構造が「の」を生成するメカニズムを

[6] 本論では、CPとDPの違いは時制の有無によるものとする。最近の研究(Lecrame (2004)など）によって名詞に時制が含まれる言語事実が観察されているが、本論は、Stowell (1982)を採用してCPはtense operatorを持つがDPはそれを持たない点が２つの機能範疇の違いであるとするAlexiadou (2001)の分析に従って、DPは時制を持たないとする。時制を含む名詞句については、本論では詳細に立ち入らない。

明らかにする。例えば、(34a)の「赤いの」は以下のような統語構造によって生成される。

(34) a. 赤いの

b.



上位の phase である DP が、語用的性質を担う。「の」が生じるのは、1.3 節での議論から既に文脈において同定できる要素、つまり、旧情報を担う要素でなくてはならない。本論では、名詞句全体が旧情報を担うと語用的に判断された phase は、Chomsky (2004)の提案する OCC 素性の一種である[G]素性（Given information の[G]を採用する）を主要部に導入すると仮定する。また、下位の phase である FP は、その主要部に phi 素性[7]を持つ。この phi 素性は、これと適切な意味的な関係を構築できる修飾要素を FP の指定部に生じさせる働きを持つ。また、この素性は、Agree 操作によって、主要部名詞が持つ phi 素性と意味的な関係を結ぶ。このことで F の phi 素性を通じて主要部名詞と連体修飾要素との意味的な制限を構築できる。

(32)から、OCC は、internal move を引き起こす、つまり、それは、phase の edge に DP を引き上げるために導入される素性であるとされている。また、この素性は、EPP 素性の一種であるとされる。Alexiadou & Anagnostopolou (1998)は、EPP 素性の照合には、XP のような句レベルの要素と X^0 のような主要部レベルのものと２つの要

[7] この素性は、先行研究（Picallo(1991)など）が主張する様々な機能範疇が主要部に持つ phi 素性と同種のものと考えて差し支えない。本論では、この素性によってその指定部に生じる連体修飾要素の意味的制限をなすことが主目的であるため、特段この素性が特定の素性を持つのか明確に示す必要がないため、phi として記しておくこととする。

素が関わることが可能で、そのどちらの要素によって認可されるかは、言語が選択するパラメターであると主張している。本論では、この分析に従って、OCC の照合には句レベルの要素の internal move によるものだけではなく、主要部要素もなすことが可能であり、どちらの要素が素性照合に関わるかはパラメターであると仮定する。[G]素性は、主要部要素によって照合される手段を選択すると仮定すると、[G]は、下位の phase である FP の主要部が持つ phi によって照合されることになる。

派生の段階に従って、「赤いの」の派生を考える。下位の phase である FP が生成され、F の[phi]素性が N によって認可される。また、その修飾成分も F の[phi]素性によって適切な修飾成分が選択される。こうして、NP の主要部と連体修飾要素が正しい意味的な関係を築く。そして、D が merge する。D は名詞句が生じる語用環境を担う。つまり、名詞句全体の定性のみならず、語用的環境を規定する。この名詞句が旧情報を担うと語用的に判断されると、D に素性[G]が付与される。この段階で、名詞句は旧情報を担う、つまり、先行要素と同一であると見なされ、NP は、音声部門において必ずしも発音される必要のないことを保証され、Spell-out される。D に付与されて[G]が統語構造に残ったままであると派生が破綻してしまう。そこで、[G]は、FP の主要部の phi 素性（つまり、主要部要素）によって照合される。照合された[G]素性が音声部門で「の」として発音される。つまり、[G]は、phi 素性の情報をたよりに自らを音声表示することで派生の破綻を回避ために音声部門で音として現れる形態要素であると分析する[8]。つまり、FP の指定部にある連体修飾語「赤い」と[G]が phi に照合された結果、生じた「の」によって「赤いの」が派生することとなる。この分析では、統語構造にあるのはあくまでも[G]素性であって、「の」という具体的な形態素ではないということになる（Halle & Marantz (1993)）。

[8] 音声表示される形態要素がなぜ「の」でなくてはならないのかについては、今の所明確な答えがない。

本論の分析によって、これまで検討されてきた「の」に関する文法現象がどのように捉えられるのか検討する。

まず、「の」が単独で生じないとする(2)の事実だが、本論の分析では、「の」はそもそも主要部名詞としての性質を持たない。[G]は、FP の phi 素性によって照合されるとの分析から、phi と適切な関係を結ぶ FP の主要部要素が義務的に存在しなければ、[G]を音声化することに必要となる統語要素が存在しないことになる。このような分析から「の」が単独で名詞句を形成できず、常に修飾要素を伴うことが説明できる。

また、(25)で観察した「の」が旧情報を担うことも正しく予測できる。

(35) a. どんな**の**を買ったの？
　　b. 誰**の**を見たの？
　　c. どこ**の**を食べたの？　　((25)を採録)

名詞句が旧情報である場合に D に生じる[G]素性が「の」の実体であることから、この素性を含む D に支配される NP は、旧情報を担うことが説明できる。

神尾(1983)が指摘する以下の例の文法的差異も本論の提案で説明できる。

(36) a. *あの（の）は面白い。
　　b. *一種の（の）です。
　　c. *３本の（の）を買ってきた。
　　d. *ある（の）がそう言った。　　(=(5))

(37) a. 1000cc の車はそれほどでもないが、2000cc のはガソリンを食う。
　　b. 4×4cm の紙片は鶴を折りやすいが、3×3 のは折りにくい。
　　c. 500ml のビンは持ち運べるが、１ℓのは持ち運びにくい。
　　d. 800m の橋は建設に１年を要するが、500m のは半年ですむ。(=(16))

本論の分析では、FP の主要部が持つ phi 素性がその指定部に生じる

連体修飾要素が持つ phi 素性と一致関係を構築する。また、FP の主要部の phi 素性は、主要部名詞の phi 素性とも一致関係に入る。つまり、FP の主要部を介して、主要部名詞は、共起する連体修飾節を選択することになる。(36)のような量化に関わる修飾要素は、名詞の phi 素性によって規定されるものではなく、逆に、その量的性質を名詞に強いる働きを持つものである。そのため、主要部名詞がその性質を規定できる要素ではなく、FP のさらに上位（であるが、DP よりも下）の機能範疇（例えば、QP）内に生じるものであるので、FP 内に生じてその主要部の持つ phi と適切な意味関係を構築できないと分析する。一方、(37)の連体修飾要素は、前述のように主要部名詞の性質を示すものであり、FP 内に生じてその主要部の phi と意味関係を結ぶことができる要素である。この分析[9]により、(36)と(37)の文法性の差異を捉えることができる。

また、本論では、以下のような事実を観察した。

(38) a. この大きなのは面白い。
b. ?ある種の奇妙なの
c. ３本の特殊なの
d. ある有名なの (=(30))

(39) a. *大きなこの(の)は面白い。
b. *奇妙なある種の(の)
c. *特殊な３本の(の)
d. *有名なある(の) (=(31))

(38)は、(36)と異なり、「の」と数量詞の間に形容詞を挿入したものであるが、この場合、文法的な表現となる。しかし、これらの形容

[9] 注意が必要なのは、本論の提案は、結果的に神尾(1983)の 1.1 節で概観した２つのタイプの連体修飾表現の区別とその統語的位置についての主張と本質的には軌を一にする点である。しかし、本論は、神尾と異なり、FP の主要部の phi 素性の介在によって、主要部名詞と連体修飾節の関係を構築するとしたことで、連体修飾表現の特徴によってその統語的位置が規定されるのではなく、あくまでも主要部名詞との意味関係によってその位置が決まる点が特徴的である。

詞は、(39)のように「の」と隣接しないと文法的とならない。

この事実は、FP 主要部が持つ phi 素性は、FP 内で適切な意味関係を構築する修飾要素が必須であることを示している。また、この一致関係が（局所性の条件に従って）１つ適切に構築されれば、その外側にどのような修飾表現が生起しても構わないと考えられる。この分析により、Ohmura (1992)が指摘する(19)の例も正しく捉えられる。(39)では、「この」や「ある」などは、(36)で議論したように、FP 内でその主要部の phi 素性と照合関係に入れないものである。FP 内で phi 素性の関係が構築できなければ、その上位に FP の phi 素性と照合可能な修飾表現があったとしても、局所的な照合関係に入れず、phi の一致関係が適切に構築されず、派生が破綻する。このため、(39)は非文法的であることが説明される。

このように、本論の分析は、(i) 「の」が単独で生じないこと、(ii) 「の」が生じる環境は語用論的な制約が働くこと、(iii) 「の」と共起する修飾要素に制限があることといった「の」に関する３つの特徴を正しく予測できるのである。

但し、以下のような連体修飾要素が所有を表す「の」や S&M (1990) が議論する「の」の場合、問題が生じると考えられる。

(40) a. 太郎の鉛筆は高価だが、花子**の**は安い。
　　 b. 学生の先生への依存は許せるが、院生**の**は許せない。

これらの「花子」「院生」が「の」を伴って FP 指定部に生じると仮定すると、D の[G]が音声表示した「の」と重複し、正しい名詞句が生成できない。そこで、本論では、日本語と中国語の名詞修飾表現の違いから「の」の生成を音声的な規則として分析する Kitagawa & Ross (1983)の分析を援用して、「の」が重複した場合、音声的な調整規則によって、ひとつの「の」となると分析する。Kitagawa & Ross (1983)の音声規則は以下である。

(41) *no* insertion rule

$[_{NP}$ X NP$]$ → $[_{NP}$ X no NP$]$

(42) -no deletion rule

$[_{NP}$ X no NP$]$ → $[_{NP}$ X NP$]$

where (a) NP ≠ e (i.e., the head NP is occupied by a phonologically full lexical item); and

(b) X = [... Tense] (i.e., X is tensed [+ V final]).

本論にとって重要なのは、(iia)の規則だが、Kitagawa & Ross (1983)は、主要部名詞が音声表示されない場合、挿入された「の」が削除されないと分析する。本論では、(42)を援用して、以下のような「の」の音声部門での規則を仮定する。

(43) 音声部門において、

$[_{DP}$ $[_{FP}$ X-の~~[NP φ]~~] の]

と「の」が連続する場合、ひとつの「の」として音声的に調整する[10]。

この規則により、(40)のそれぞれの例は、音声部門で(43)の構造のように「の」が重複する。そのため、音声的な再調整規則に従って、「の」が１つのみ音声表示されることとなり、正しい名詞句を派生できると分析する。

3. まとめと今後の課題

本論では、「の」について議論し、それは、(i) 単独で名詞句を形成できないが、(ii) 連体修飾表現と共起することで代名詞的な性質を持ち、(iii) 共起可能な連体修飾表現に制限がある、という統語的な条件に加えて、「の」が生じる名詞句は常に旧情報となるという意味的（語用的）条件が持つことを先行研究から明らかにした。そして、これらの条件を統語構造から導き出すために、Chomsky (2000)以降

[10] 同様の調整規則の必要性については、奥津(1974)にも議論がある。

の MP の主要な概念である phase と Chomsky (2004)によって提案された OCC 素性を援用して、名詞句の統語構造とインターフェイスに関わる理論を整備し、DP が CP との相同性から phase であるとした(33)の名詞句の統語構造を主張した。本論では、前節や文脈によって名詞句全体が旧情報となり、その主要部の名詞を削除してもその内容がそれらによって復元可能であるとインターフェイスが判断した場合、そのような名詞句は、phase である DP の主要部に旧情報であることを示す[G]素性が付与され、それが適切な照合関係を構築されると、NP の部分が spell-out され発音されず、その代わりに[G]素性が音声部門において「の」として発音されるとの分析を提示した。この提案により、「の」についての上記の統語的な条件と語用的な条件の両面が適切に捉えられると主張した。本論の提案により、「の」は先行研究とは異なる性格づけを得ることとなった。

最後に本論の課題をまとめておく。まず、本論の提案した分析が英語などの言語の名詞句内削除の事実や英語の one 代替の事実など、他の言語に見られる相同の現象についても説明可能か検証することが重要である。また、名詞句と語用の関係についてもさらに事実を精査して、本論の提案がどのような予測をもたらし、どのような言語事実の説明に有用なのか議論する必要があると思われる。

References

Abney, Steven. (1987) The English noun phrase in its sentential aspect. Doctoral Dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

Alexiadou, Artemis. (2001) *Functional structure in nominals: Nominalization and ergativity.* Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Alexiadou, Artemis. and Elena Anagnostopoulou. (1998) Parameterizing AGR: Word order, V-movement, and EPP-checking. *Natural Language and Linguistic Theory* 16, 491-539.

Chomsky, Noam. (1981) *Lectures on government and binding: Pisa lectures.* Dordrecht: Foris.

Chomsky, Noam. (2000) Minimalist inquiries: the Framework. In R. Martin, D. Michaels and J. Uriagereka (eds.), *Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89-156. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam. (2001) Derivation by phase. In M. Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: a life in language*, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam. (2004) Beyond Explanatory Adequacy. In A. Belletti, *Structures and beyond: the Cartography of syntactic structures, volume* 3, 104-131. New York, NY.: Oxford University Press.

Fukui, Naoki. (1986) A Theory of category projection and its applications. Doctoral Dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

Grimshaw, Jane. (1990) *Argument structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Haegeman, Liliane & Jacqueline Guéron, (2001) *English grammar: A Generative perspective*. Malden, Mass.: Blackwell Publish Inc.

Halle, Morris & Alec Marantz. (1993) Distributed morphology and the piece of inflection. In K. Hale & S. J. Keyser, (eds,) *The View form building 20*, 53-109. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Hankamer, Jorge & Ivan Sag. (1976) Deep and surface anaphora. *Linguistic Inquiry* 7, 391-428.

長谷川信子 (2006) 「日本語の主文現象と統語理論：今、主文現象が面白い」 *Scientific Approaches to Language* 5, 1-8. 神田外語大学言語科学研究センター

神尾昭雄 (1983) 「名詞句の構造」 井上和子編『講座 現代の言語 1 日本語の基本構造』 77-126. 三省堂

金水敏 (1995) 「日本語のいわゆる N'削除について」 『第 3 回南山大学日本語教育・日本語学国際シンポジウム報告書』153-176. 南山大学.

Kitagawa, Chisato and Claudia N. Ross (1982) Prenominal modification in Chinese and Japanese. *Linguistic analysis* 9, 19-53.

Jackendoff, Ray. (1971) Gapping and related rules. *Linguistic Inquiry* 2, 21-35.

Lecarme, Jacqueline. (2004) Tense in nominals. In J. Gueron & J. Lecarme (eds.), *The Syntax of time*, 441-475. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Llombart-Huesca, Amlia. (2002) Anaphoric one and NP-ellipsis, *Studia Linguistica* 56, 59-89.

Lobeck, Anne. 1995. *Ellipsis, Functional heads, licensing, and identification*. Oxford, Mass.: Oxford University Press.

Ohmura, Mitsuhiro. (1992) On N'deletion in English and Japanese. *Linguistics and Philology* 12, 97-116.

奥津敬一郎. (1974) 『生成日本文法論』 大修館書店

Picallo, Carme. (1991) Nominals and nominalizations in Catalan. *Probus* 3, 279-316.

Ritter, Elizabeth. (1991) The functional categories in noun phrases: Evidence from Modern Hebrew. In S. Rosestein (ed.), *Syntax and semantics* 25, 37-62. San Diego, Cal.: Academic Press.

Stowell, Tim. (1982) The Tense of infinitives. *Linguistic Inquiry* 13, 561-570.

Tonoike, Shigeo. (1991) An Operator-subject analysis of Japanese sentences and noun phrases: LF representations of *Wa, Mo, Ga*, and *NO*. MS., Meiji Gakuin University & MIT.

〒697-0016
島根県浜田市野原町 2433-2
島根県立大学

ma-yamada@u-shimane.ac.jp